

大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」

金 文 京

一 はじめに

日本最古の漢詩集『懷風藻』に載せる大津皇子の「臨終一絶」ときわめて類似した詩が、中國及び朝鮮の複数の人物の「臨刑詩」として、十世紀から二十世紀に至るさまざまな文獻に見える不思議については、すでに小島憲之、濱政博司の兩氏による研究があり、筆者もまた兩氏の挙げられた資料の他に、元代の雜劇の用例などを補った論考を發表したことがある。^①しかし前稿では紙幅の制約のため、この問題を解く鍵となる大津皇子と陳後主の詩の關係について十分に論じることができなかった。そこでここに稿を改めて、兩者の關係を更に検討し、これら一連の類似作が、はたして日本の大津皇子の作が中國に傳播した結果なのか、それとも原作はやはり中國のものなのかという問題に對して、より明確な答えを導き出すことにしたい。

まずは行論の都合上、前稿と重なるが、一連の「臨刑詩」を出據文獻の時代順に次に列擧する。

- 1 大津皇子(六六三—六八六)「臨終一絕」『懷風藻』(七五二)
金烏臨西舍，鼓聲催短命。泉路無賓主，此夕誰(一作離)家向。
- 2 陳後主(五五三—六〇四)詩 釋智光撰『淨名玄論略述』^③卷一本(八世紀中葉)
鼓聲推(催)命役(短?)，日光向西斜。黃泉無客主，今夜向誰家。
- 3 五代·江爲「臨刑詩」 宋·陶岳『五代史補』卷五(二〇二)、又明·胡震亨『唐音統笈』戊簽卷七六七、『全唐詩』卷七四一
衙(『全唐詩』誤作衙)鼓侵人急，西傾日欲斜。黃泉無旅店，今夜宿誰家。
- 4 元雜劇「薛仁貴衣錦還鄉」四折「豆葉黃」曲『元刊雜劇三十種』^⑤(十四世紀中葉)
黃泉無旅店家，晚天今夜宿在誰家。
- 5 明·孫蕢(?!—三九三)「臨刑詩」『西菴集』^⑥卷七(十五世紀初)
鼙鼓三聲急，西山日又斜。黃泉無客舍，今夜宿誰家。
- 6 南戲『小孫屠』第十九齣「香柳娘」曲『永樂大典戲文三種』^⑦(十五世紀初)
黃泉無旅店，今夜宿誰家。
- 7 朝鮮·成三問(一四一—一五六)「臨刑詩」『死六臣文集』^⑧所引『稗官雜記』(一五三八)
擊鼓催人命，回看日欲斜。黃泉無一店，今夜宿誰家。
- 8 『水滸傳』(容與堂本)第八回(十七世紀前半)
萬里黃泉無旅店，三魂今夜落誰家。
- 9 葉德輝(一八六四—一九二七)「臨刑詩」 周作人「孫蕢絕命詩」^⑨(一九三五)

慢播三通鼓，西望夕陽斜。黃泉無客舍，今夜宿誰家。

10 金聖嘆（一六〇七—一六六一）「臨刑詩」 伍俶「日本之漢詩」¹⁰（一九五五）

御鼓丁東急，西山日又斜。黃泉無客舍，今夜宿誰家。

11 戴名世（一六五三—一七二三）「臨刑詩」『安徽歷史上科學技術創造發明家小傳』¹¹（一九五九）

戰鼓冬冬響，西山日已斜。黃泉無客舍，今夜宿誰家。

右の諸作のうち、陳後主、成三問、葉德輝、金聖嘆、戴名世のものは、所據の文獻が信憑性を闕き、また當人の文集にも記載がないため、僞託であることが明らかであるが、大津皇子、江爲、孫蕢については、一般には本人の作品と認められている。元雜劇、戲文、『水滸傳』の用例は、この詩が中國元明代においてすでに成語化していたことを示そう。

さて一見して明らかのように、これら一連の作品のうち、2陳後主詩以下は、第一句で鼓聲、第二句で斜陽、第三句で黃泉に旅店のないこと、第四句で今夜の宿のない不安を言い、また「斜・家」二字で押韻する點すべて共通しており、相違は個別の字句にとどまる。同一の詩のヴァリエーションと考えてよいであろう。これに對して1大津皇子「臨終一絶」は、第一句が斜陽、第二句が鼓聲と順序が他と逆であり、押韻も「命・向」の二字になっている。この二字は嚴密には押韻字とは認められないが、少なくともこの詩を書いた當人はこれで韻を踏んだと考えていたであろうことは、すでに前稿で述べた。

日中朝三國にわたり八世紀から二十世紀に及ぶ長い期間に、これだけの似た詩が存在するのは、到底偶然とは考えられず、必ずや傳播摸倣の結果であるにちがいない。とすれば一部の人々が説くように、時期的に最も早いと考えられる大津皇子の作が中國に傳わり、やや形を變えてその他の作品となったのであろうか。前稿ではこれに對して否定的な見解を述

べたが、その論據を十分に示すことができなかった。

この問題を考える上で最も重要な鍵となるのは、時期的に天津皇子の詩とほぼ同じく、また詩としては江爲以下の中
國・朝鮮の諸作により類似している陳後主の詩が、大津皇子の詩とどういふ關係にあるのかを解明することであろう。次
に章を改めて、いわゆる陳後主の詩を検討してみたい。

二 陳後主の「臨行詩」について

奈良時代の僧、智光撰『淨名玄論略述』に陳後主の作として、大津皇子の詩と同様の詩を載せることを初めて指摘され
たのは、小島憲之氏であった。^①ただし氏は、それ以上の言及はされていない。

智光は河内國安宿郡あすかのこほりの人、俗姓は鋤田連、後に上村主かみのすけりに改める。その傳は、『元亨釋書』卷二、『本朝高僧傳』卷四など
にあり、また『扶桑略記』卷四（天平十七年一月）、『日本靈異記』卷中一七、『今昔物語集』卷十一—二などには、彼と行基
にまつわる説話が見えている。奈良元興寺の智藏より三論の教えを受けた奈良時代の名僧の一人で、『淨名玄論略述』四卷
の他、『般若心經述義記』一卷、『大般若經疏』二十卷、『法華玄論略述』五卷、『中論疏記』三卷など多數の著作があり、
うち『淨名玄論略述』と『般若心經述義記』が傳存している。

『淨名玄論略述』は、三論宗の高僧、隋の吉藏（五四九—六三三）の著『淨名玄論』に對する注釋である。問題の陳後主の
詩は、隋の文帝が陳を滅ぼし、當時建康（南京）にいた吉藏を長安に呼び寄せたことについての注の中に見えている。以下
に關連部分を引用する。（一）内は筆者が改めた字である。

如有傳曰：後周終王號少帝闡。將諸大夫京（享）祀先廟。掌客之臣楊堅有二美女與一男、男是楊光也。堅使此二女舉觴上帝。帝感於二女好色、即敕之曰、「欲納其女弟耳」。堅乃獻之。仍納此女而棄先妃、寵愛甚重。經乎三年、女啓帝曰、「欲見父焉」。乃詔、「莫過三日歸矣」。女退語父、「欲帝位乎」。父曰、「若似朝花、一日得耳」。女曰、「欲齎鋸刀」。遂置靴裏而入宮中。帝善非違約、甚爲讎樂而臥。女以鋸刀密刺帝頸、乃出敕曰、「楊堅入宮、因寵愛女而讓位於堅矣」。堅乃施（旋？）行云、「威憲去可去、用可用」。不知所以然之、忽行此事。已獲天下、群臣皆服、無敢出異言者。躬治萬機、其勢亦爾。——中略——

凡陳合五主三十二年、從大將軍陳霸先至叔寶。叔寶在位八年、以己酉年正月爲隋楊堅所威（滅）。叔寶之臣號妙景、其妻妍美、王聞感念、乃任景以將軍、居戍隋之南境。而集（？）其妻納於宮中。景乃言、「戍境有限、無所奈何。心雖甚悔、今無所爲」。遂生叛逆、使人告隋朝曰、「叔寶無義失道、虐惡甚之」。堅固（故）作色而怒曰、「天授不取、還受殃耳」。乃以楊光爲大將軍、率諸兵卒、度江伐陳。臨發之日、堅語光等、「朕聞其吉藏者善達法門、宜申誠心要請之。至今伐于陳、豈貪其地乎。良由有道之王（主？）耳」。以鐵鎖與鼓（船？）權爲浮梁而度津、景前導而伐之。遂平其城而囚執叔寶并子。光乃申堅意確（？）請。大師撫嘆而應之。既已、還于長安矣。寶發路詠曰、「鼓聲推（催）命役（短？）」、日光向西斜。黃泉無客主、今夜向誰家。」及度□津至梁上、寶詠曰、「聞道長安路、今年過□津。請問浮梁上、度幾失鄉人。」遂至於隋。諸家大人看之感慕。寶子入宮、堅便（使）爲詠。詠曰、「年少未敢書、口詠牆上草。生處非不高、但恨逢霜早（早）」。又作詠曰、「野林無大小、山花色并鮮。唯有權折枝、獨自不知春。」

（卷一本）

傳ありて曰うが如し（？）：後周の終王は少帝闡と號す。諸大夫をひきいて先廟に享祀す。掌客の臣楊堅に二美女と一

男あり、男は楊光なり。堅はこの二女をして觴を挙げ帝に上らしむ。帝は二女の好色に感じ、即ちこれに敕して曰く、「その女弟を納めんとす」と。堅は乃ちこれを獻ず。よりてこの女を納め先妃を棄て、寵愛甚だ重し。三年を経て、女は帝に啓して曰く、「父を見ることを欲す」と。乃ち詔す、「三日を過ぎずして歸れ」と。女退きて父に語るに、「帝位を欲するか」と。父曰く、「朝花に似たるが若し、一日得るのみ」と。女曰く、「銛刀を齎さんと欲す」と。遂に靴裏に置きて宮中に入る。帝は違約せざるを善しとし、甚だ譙樂をなして臥せり。女は銛刀を以て密かに帝の頸を刺し、乃ち出でて敕して曰く、「楊堅は宮に入れ、女を寵愛せしに因りて位を堅に譲らん」と。堅は乃ちたちまち(?)行きて云う、「威憲去るは去るべく、用いるは用いるべし」と。これを然りとする所以を知らず、忽ちこの事を行えり。已に天下を獲て、群臣みな服し、敢えて異言を出す者なし。躬ら萬機を治む、その勢またしかり。——中略——

凡そ陳は合わせて五主三十二年、大將軍の陳霸先より叔寶に至る。叔寶位に在ること八年、己酉年(五八九)正月を以て隋の楊堅の滅すところとなる。叔寶の臣妙景と號するものあり、その妻妍美、王聞きて感念す。乃ち景を任ずるに將軍を以てし、隋を成るの南境に居らしむ。しかしてその妻を集め(?)宮中に納む。景乃ち言う、「境を成るに限りあり、奈何とするところなし。心に甚だ悔ゆるといえども、今はなすところなし」と。遂に叛逆を生じ、人をして隋朝に告げしめて曰く、「叔寶は義なく道を失い、虐惡甚だし」と。堅はことさらに色を作し怒りて曰く、「天授くるに取らざるは、かえって殃を受くるのみ」と。乃ち楊光を以て大將軍となし、諸兵卒を率い、江を度りて陳を伐てり。發するに臨むの日、堅は光等に語る、「朕聞くにそれ吉藏なる者は善く法門に達すと、宜しく誠心を申べてこれを要請すべし。今に至りて陳を伐つは、豈にその地を貪らんか。まことに有道の王(主?)に由るのみ」と。鐵鎖と鼓(船?)を以て權りに浮梁をなして□津を度り、景は前導してこれを伐つ。遂にその城を平らげ叔寶並びに子を囚執す。光は乃ち堅の意確く請うを申ぶ。大師は撫嘆してこれに應ず。既にして長安に還れり。寶は路を發するに詠みて曰く、

鼓聲命の短き(?)を催し

日光西に向いて斜めなり

黄泉に客主なく

今夜誰が家に向わん

□津を度り梁上に至るに及んで、寶詠して曰く、

長安の路を聞道けるに

今年□津を過ぐ

請問す浮梁の上

幾たりの失郷の人の度る

遂に隋に至れり。諸家の大人これを見て感慕す。寶の子宮に入るに、堅は詠をなさしむ。詠じて曰く、

年少いまだ敢えて書かず

□に牆上の草を詠む

生いし處高からざるに非ず

但だ霜に逢うこと早きを怨む

また詠を作して曰く、

野林大小となく

山花は色并びに鮮かなり

ただ權りそめに枝を折るものあり

獨^{ひと}自^り春を知らず

右は要するに、北周と陳の滅亡にまつわる一種の傳説であろう。まず北周については、最後の帝、少帝闡が後に隋の文帝となる楊堅の女を見染め、その次女を妃に納れ寵愛したが、女は少帝を刺殺して、父の楊堅を帝位につけたという話。次に陳については、後主陳叔寶が臣下の妙景なる者の妻を見染め、妙景を國境警備に追いやってその妻を奪ったため、妙景は隋に寝返り、その先導となって陳を滅したという話である。いずれも史實にない虚構であることは言を待たない。ただしここでは大師吉藏が建康から長安へ移ったことの背景を説明するために引用されており、本論が問題とする詩を含む陳後主とその子の計四首の詩は、いわばそのついでに言及されている。これらの詩も言うまでもなく偽託である。陳後主の詩は建康を發するに當って詠まれたことになっているので、ここではかりに「臨行詩」と呼ぶことにしたい。

『淨名玄論略述』の撰述年代は明らかでないが、智藏の現存するもう一つの著作である『般若心經述義』¹³の序に、

然自志學至于天平勝寶四年、合三十箇年。

とあり、天平勝寶四年（七五二）に智藏が四十五歳であったことを知りうる。『淨名玄論略述』もだいたいその前後の作と考えてよいであろう。すなわち七五一年成立の『懷風藻』と『淨名玄論略述』は、ほぼ同時期のものであり、大津皇子、陳後主二人の詩は、この時期に並び行われていたことになる。

さてこの二人の詩の先後關係は、もし兩者が共に眞作であれば、陳が亡んだのは五八九年、大津皇子の刑死は六八六年であるから、問題なく決することができる。しかしながら陳後主の詩は明らかに後人の偽託であり、大津皇子の詩についてもその可能性が高い。

大津皇子の辭世の作としては、『懷風藻』に載せる漢詩の他に、次の和歌が『萬葉集』卷三「挽歌」に見えている。

大津皇子、被死^{みまか}らしめらゆる時、磐餘^{いわわれ}の池の陂^{つづみ}にして涕^{なみだ}を流して作りましし御歌一首
ももづたふ磐餘の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ

ところでこの歌の最後の「雲隠りなむ」は、『萬葉集』の他の用例からして、貴人の死を指す言葉であり、自分の死について用いるのは不適當であるため、この歌は後人の僞託であるとする説が有力である^④。もし和歌が僞託であるならば、漢詩についても當然同じ疑いがもたれるであろう。したがって確實なことは、八世紀中葉の日本に、大津皇子「臨終一絶」と陳後主「臨行詩」という互いに内容のよく似た、ただし叙述の順序や押韻字が異なる二つの詩が同時に存在していたという事實のみとなる。

もし陳後主の詩が日本で作られたものであれば、日本の詩が江爲以下の中國の「臨刑詩」に影響をあたえた可能性はさらに高まるであろう。陳後主の詩は大津皇子の作よりも、中國の「臨刑詩」により似ているからである。逆に陳後主の詩が中國のものであるならば、それと大津皇子の詩との關係が問題となろう。

次に章を改めて、陳後主「臨行詩」を含む『淨名玄論略述』の説話内容について検討してみたい。

三 『淨名玄論略述』所傳説話の性格

『淨名玄論略述』の北周、陳滅亡にまつわる二つの説話は、ある「傳」を引用するという形で語られている。この「傳」の文章には抄寫翻刻の際の誤記が少なからずあるように思えるが、それを差し引いて考えても、その生澁な文體は到底中國人の書いたものとは思われない。特に楊堅の子の楊廣、すなわち後の隋の煬帝を、楊光と表記するのは、中國人ならば

決して犯かし得ない誤りである。この「傳」は日本人の手になるものと考えてよいであろう。あるいは當時の國際關係からして、百濟や新羅などの朝鮮半島の人間、乃至はそこから日本への渡來人によって書かれた可能性も否定できない。

しかしながらこの「傳」が中國人の書いたものでないことは、その内容までもが中國のものでないことを必ずしも意味しないであろう。中國の文獻が日本や朝鮮半島でリライトされるか、または日本、朝鮮半島から中國に渡った者が、當時の所聞を記録することもありうるからである。

「傳」の語る二つの説話は、もとより虚構であるが、かといって歴史事實と全く無關係ではない。まず北周滅亡の説話について言えば、楊堅はたしかに北周の外戚であった。ただしその女が嫁いだ相手は、少帝（『周書』などの史書では靜帝という）闡ではなく、その父の宣帝である。そして宣帝は、史書によれば一種の暴君で、臣下をみだりに誅戮し、ために「内外恐懼し、人自ら安んぜず」（『周書』卷七「宣帝紀」）であったという。帝が病に伏すと、臣下の劉昉らが詔を矯つて楊堅を輔政としたが、皇后楊氏はそれを聞いて、「心甚だ悦ぶ」（『周書』卷九「宣帝楊皇后傳」）であった。これが楊氏が帝を弑たという話の生まれたいわば背景であろう。

次に陳の滅亡については、さらに明確な背景を史書の中に求めることができる。周知の如く陳後主、陳叔寶は、史上有名な風流天子であった。『南史』卷六十七「蕭摩訶傳」に「後主は摩訶の妻と通じ、故に摩訶は勁兵八千を領するも、初めより戦意なし」と見え、後主が配下の有力な將軍であった蕭摩訶の妻と密通したため、それを知った蕭摩訶は對隋戦への意欲を失ったことを記す。蕭摩訶は隋に寝返ったのではないが、「初めより戦意なし」というのはそれに近いであろう。この蕭摩訶が「傳」に述べる妙景のモデルであったと考えられる。ただしこの話がはたして史實かどうかには、やや疑問がある。というのも『南史』に見えるこの記述が、『南史』が参照したはずの『陳書』の「蕭摩訶傳」の方には見えないからである。

清・趙翼の『廿二史劄記』が、「南史は陳書に於て甚だしくは増刪せず」（卷十二）とつとに指摘するように、兩書の内容は大同小異である。しかしそれでも異同が全くないわけではなく、現に趙翼は『陳書』にはなく『南史』が増補した例として、まず第一に「蕭摩訶傳」で、陳が敗れた後、隋將の賀若弼が蕭摩訶の頸に刀を當てたところ、蕭は顔色ひとつ變えなかったで、釋して禮遇したという話柄を擧げている。蕭摩訶の妻と後主とのことについて趙翼は言及していないが、ともかく『南史』の「蕭摩訶傳」は『陳書』に比べて幾分の増補があるのである。では『南史』の撰者、李延壽はいったい何によって、これらの記述を補ったのであろうか。

中華書局標點本『南史』の出版説明は、李延壽の自序によって、それを物語性と口語性の強い當時の雜文、「小説短書」の類であろうと想像している。李延壽の「上南北史表」（『全唐文』卷一五四）に、「小説短書は湮落し易く、脱し或いは殘滅すれば、求勘するも一とする所無し」と言うのは、李延壽がそのような資料を少なくとも参照していたことを物語ろう。「蕭摩訶傳」で李延壽が補った二つの事がら、すなわち蕭摩訶の妻と陳後主との關係、それに彼が刀を頸につきつけられても毅然としていたというのは、なるほど「小説短書」の話柄に相應しいであろう。それでは李延壽が用いたであろう「小説短書」的な資料をある程度具體的に特定できないであろうか。

『隋書』『經籍志』の史部・舊事類に『開業平陳記』二十卷が著録されている。開業とは、隋文帝の年號、開皇と煬帝の年號、大業を合わせて言ったものである。この書物は『新・舊唐書』の「經籍志・藝文志」では共に雜史類に分類され（卷數は十二卷とする）、撰者は北齊、隋、唐の三朝に仕えた裴矩（五四六—六二七）とされる。書名、それに雜史に分類された點から考えて、その内容は陳滅亡當時のさまざまな逸事を記録したものであつたろう。『舊唐書』卷六十三「裴矩傳」によると、彼は博學をもつて早くより名を知られ、陳を伐つ役に際しては元帥記室、すなわち總指令官の書記として從軍し、陳が平定されると晉主廣（後の煬帝）の命により、高潁と共に陳の圖籍を接收したという。つまり裴矩は陳滅亡時のありさま

を實地に見聞し、かつ陳の宮廷に藏された資料を利用できる立場にあったのである。ただし陳滅亡に際してのさまざまな出来事は、ただちに記録されることはなかったであろうから、『開業平陳記』は主に裴矩の見聞によって書かれたであろう。『裴矩傳』は、「開業平陳記十二卷を撰し、代に行わる」と述べており、この書物は當時ひろく讀まれていたらしい。李延壽は當然それを見たであろう。『開業平陳記』はすでに逸書のため確認することはむろんできないが、李延壽が『南史』の「蕭摩訶傳」において先の二つの事柄を補うに際し用いたのは、あるいはこの書物ではなかったらうか。

この點をさらに考えるため、次に『開業平陳記』についてもう少し述べてみたい。なお『南史』が記す蕭摩訶の妻と後主との關係が、もし『開業平陳記』からの引用であつたとすれば、撰者裴矩の閱歷から考えて、それはあるいは事實であつたかも知れない。『陳書』がそのことを書かなかつたのは、撰者の姚察がもと陳の秘書監であつたため、舊主のために憚つたとも考えられよう。眞相はもとより確認不可能であり、またそれは本稿の目的でもないが、たとえそれが事實であつたにせよ、ある種の傳聞として廣まっていたであろうことは、やはり『開業平陳記』の性格を考えることによって判明する。

四 『開業平陳記』にみえる陳後主の詩

『開業平陳記』は残念ながら今日傳わらないが、その逸文と覺しきものが幸いにも殘されている。元・陶宗儀編『說郛』（明抄本に據る排印本）卷四十五に收める『平陳記』一卷がそれである。その内容を見ると、陳滅亡にまつわる妖異や詩讖、童謠が大半を占め、傳聞的あるいは小説的と言ってもよい性格がきわめて強い。王朝滅亡にこの種の話題はつきものであるが、長らく續いた南北の分裂が終り統一王朝が出現した當時においては、ことのほか多くの風聞が生まれたであろうことは想像に難くない。まして主役は、希代の風流天子、寵妃の張麗華との間に有名な「玉樹後庭花」の詩をはじめ数々の

話題を伝える陳後主である。

この『說郛』本『平陳記』の中で、本稿にとって興味深いのは、「沈后詩」と題する次の記事である。

其皇后沈氏者、望蔡侯君理之女也。以張貴妃權寵、動經半年不得一御。陳主嘗至沈后處、暫入即還。謂后曰、何不留我也。沈后爲詩曰、誰道不相憶、見罷便成羞。情知不肯住、教我若爲留。

その皇后沈氏なる者は、望蔡侯君理の女なり。張貴妃寵を權するを以て、ややもすれば半年を経るも一たびも御せらるるを得ず。陳主かつて沈后の處に至り、暫く入りて即ち還る。后に謂いて曰く、何ぞ我を留めざるやと。沈后詩をつくりて曰く、

誰が相憶わずといわん

見ればすなわち羞を成す

ここににとどまることを肯んぜざるを知れば

我をしていかでは留めしめん

ところで元・林坤の『誠齋雜記』（『津逮秘書』收）卷下には、右とほとんど同文が出典を記さずに引用されている。そしてそこでは、「平陳記」での「何ぞ我を留めざるや」という陳後主の言葉が、次のような詩になっている。

留人不留人

人を留めるや人を留めざるや

不留人也去

人を留めざるもまた去らん

此處不留人 此の處人を留めざるも

自有留人處 自ずと人を留める處あり

したがって先の沈後の詩は、この陳後主の詩に對する答詩となっており、兩者比較すると、『平陳記』の方は陳後主の詩を省略したものである。なお明・馮惟訥編『詩紀』卷一〇八の陳後主の項は、『平陳錄』からの引用として、右の二つの詩を各々「戲贈沈后」「答後主」と題し收めている。『平陳錄』は『平陳記』の誤りであろう。

この『平陳記』に見える陳後主と沈後の詩が、はたして唐初の裴矩の原著にあったかどうかには疑問があり、後世の僞託である可能性も考えられようが、しかしそれなりに由來の古いものであることは、詩の一部が別の書物に引用されていることによって確め得る。

右の陳後主の詩の後半、すなわち「此處不留人、自有留人處」の二句は、實ははなはだ人口に膾炙したものであって、唐・顏師古の撰と傳える『大業拾遺記』（別名『隋遺錄』）卷上に、「此處不留儂、會有留儂處」と、「人」を「儂」に變えたかたちで見えている。ただしそこのこの二句は、陳後主の作ではなく、後主の寵妃、張麗華が語った隋の煬帝の作ということになっている。『大業拾遺記』が顏師古の著ではなく後人の僞託であることは、すでに『四庫提要』卷一四三小説家類存目が、北宋・王得臣の『塵史』及び南宋初の姚寬『西溪叢語』に據りつつ辨じている。しかしこれによれば、おそらくも宋代にはその書は成立していたことになる。今、南宋末の叢書『百川學海』に收める『隋遺錄』卷上より、關連箇所を引用する。ことは煬帝が廣陵（揚州）に遊び、恍惚の間に陳後主と張麗華に遇ったという小説的設定での問答として見える。

麗華拜、求帝一章、帝辭以不能。麗華笑曰、「嘗聞此處不留儂、會有留儂處。安可言不能。」帝強爲之操觚曰、「見面無多事、聞名爾許時。坐來生百媚、實箇好相知。」麗華捧詩、頽然不憚。

麗華拜し、(煬)帝に一章を求む、帝辭するに能わざるを以てす。麗華笑いて曰く、「かつて聞く、此の處われを留めざるも、かならずわれを留むる處ありと。いづくぞ能わずと言うべけんや」と。帝強いてこれがために觚を操りて曰く、「面を見れば多事なし、名を聞くことかくばかりの時なるに。坐來百媚生ず、實に箇の好き相知」と。麗華詩を捧じて、頽然と憚ばず。

要するに張麗華が煬帝の舊作の二句を引いて、煬帝にむりやり詩を作らせたという内容で、やはり一種の問答形式でありかつ諧謔を伴う點が、陳後主と沈后の場合に似ていよう。煬帝の詩の第三句は、この前に張麗華が帝の求めに應じ、立つて「玉樹後庭花」を舞ったのが、すでに「往時の姿態無き」ことをからかったもので、麗華が詩を見てよろこばなかったのはそのためであった。『隋遺錄』には、このような妃嬪と煬帝あるいは陳後主とのやりとり及びその際の詩が多數見えている。馮惟訥『詩紀』が、「按ずるに小説家載するところの後主と煬帝の諸詩は、辭多く類せず、その後人の依託たること疑いなし」と言うのは、主にこの書を念頭に置いての發言であらう。

「此處不留人、自有留人處」の二句は、さらに近世の戯曲小説などにもしばしば見えている。たとえば元明間無名氏の「施仁義劉弘嫁婢」雜劇(『脈望館鈔校本』)第一折の王秀才のせりふに、

便好道此處不留人、自有留水處、哦、是留人處。

よく言うじゃないか、此の處人を留めざれば、自ずと水を留める處、おっとちがった、人を留める處ありとな。

とあるように、この語はすでに成語化しており、實は現在の口語でもよく用いられているのである。

陳後主と沈後の問答詩及びそれに類する諸作を、『淨名玄論略述』の陳後主とその子の詩と比較すると、いくつかの共通點が浮かびあがる。

まず第一に、どちらも五言四句と詩型が共通しており、かつ平易な口語的表現を用いた點も似ている。次に作者に擬せられる人物が複數である點が指摘できる。『淨名玄論略述』の陳後主「臨行詩」については言うまでもない。「戲贈沈后」詩の後半二首は、既述の如く『大業拾遺記』ではやや形を変えて煬帝の詩とされているし、また同じく『大業拾遺記』に見える陳後主の小寫詩は、『西溪叢語』(『津逮秘書』收)によれば、唐の方域の詩である。このような作者の不定性は、これらの詩の説話的な性格を物語るであろう。第三に、第二の點と關連して、これらの詩の一部が元曲や『水滸傳』などの戲曲小説に用いられ、成語化している點を舉げることができる。これは作者の不定性がさらに進んで無名化したものと見なしうる。

さらに『平陳記』『大業拾遺記』に見える後主と煬帝の詩は、問答體乃至はある特定の場での求めに應じた即興の作である點に特徴があるが、『淨名玄論略述』での後主の子の「年少未敢書」と「野林無大小」で各々始まる二首も、やはり隋の宮廷において文帝の命によって詠まれた即興の作であった。この二首の作られた状況及びその内容は、たとえば有名な曹植の「七步詩」を連想させるものがある。後主の二首の「臨行詩」はそのような設定にはなっていないが、「今夜向誰家」「請問浮梁上」と、どちらも問いかけになっている點を考えれば、あるいはもとは問答形式になっていたのかも知れない。「黃泉無客主」の句の「客主」の意味については後にも觸れるが、この語もやはり元來は客主の問答を暗示していたとも考えうる。『漢書』藝文志に「客主賦」を収めるように、「客主」は問答を連想しやすい語である。問答體の詩に古くから物語的な性格が濃いことは、李陵、蘇武の詩や『遊仙窟』などを見れば明らかであろう。

むろん兩者には相違点もある。『平陳記』『大業拾遺記』の詩がおおむね平仄を整えた絶句體であるのに對し、『淨名玄論略述』の詩は平仄の整わない古詩である點は最も大きな相違である。この點から考えると、『淨名玄論略述』の詩の方が、唐初の『開業平陳記』の内容としてはむしろ想應しいであろう。確かなことはもとより不明であるが、『淨名玄論略述』の話がある程度史實を踏まえていることからしても、その内容及び詩は、陳滅亡後の江南地方で發生した傳説を反映していると思われるのが最も自然である。そして當時の朝鮮半島、日本は中國文化を受け入れていまだ日が淺く、このような傳説や詩を生み出す狀況も、また必要もなかったと考えられる。この點についてはさらにもう一つの傍證がある。

五 『中論疏記』所引の『淡海記』について

『淨名玄論略述』の北周滅亡についての傳説と全く同じ記述が、平安時代の僧、釋安澄の『中論疏記』(八〇六年成書)卷三に引く『淡海記』なる書物にも見えることについては、やはり小島憲三氏に指摘がある。¹⁸⁾『淡海記』の著者は、大友皇子の曾孫で、『唐大和尚東征傳』の撰者でもある奈良朝隨一の知識人、淡海三船であると考えられている。¹⁹⁾淡海三船はまた『懷風藻』の編者としても、最も有力視されている人物であった。

『中論疏記』は隨所にこの『淡海記』を引用するが、中に次のような興味深い記述が見られる。

淡海記云、仲尼與十弟子去於陳國說禮義時、衆人不愛、即成蔡蘭(陳?)處(厄?)、時飢可死之。爾時有一人、其形被鎧。子路走出、打即成死大魚。此魚食時、臣諫曰、「不義食之。」孔子曰、「是時不以助身。」故云賢聖定業不得脫也。

又論語第五卷子罕篇、「子畏於匡、曰、文王既沒、文不在茲乎。」鄭玄曰、「匡人誤圍夫子、以爲陽虎。陽虎嘗暴於匡人。」

夫子弟子剋頤、時又與虎行。後爲夫子御、至匡。匡人相與識剋、夫子容貌與虎相似、故匡人以兵而圍之。

『淡海記』に云う、仲尼、十弟子と陳國に去き禮義を説きし時、衆人受けず、即ち蔡蘭（陳？）の處（厄？）を成す。時に飢えて死すべし。この時一人あり、その形鎧を被る。子路走り出で、打てば即ち死せる大魚と成る。此の魚を食べし時、臣諫めて曰く、「不義にしてこれを食す」と。孔子曰く、「この時以て身を助けざるや」と。故に云う、賢聖の定業は脱るるを得ざるなりと。

又『論語』第五卷子罕篇に、「子匡に畏れ曰く、文王既に没す、文茲に在らずや」と。鄭玄曰く、「匡人誤りて夫子を圍み、以て陽虎となす。陽虎かつて匡人に暴す。夫子の弟子剋頤、時に又虎と行き、後に夫子の御たりて、匡に至る。匡人相ともに剋を識り、夫子の容貌虎と相似る、故に匡人兵を以てこれを圍む」と。

右の引用前半の『淡海記』の文章にはおそらく誤字が相當あり、また日本語風の語順の部分もあって、正確な意味を捕捉し難いが、要は孔子とその弟子が所謂陳蔡の厄に際し、突然現れて子路に殺された男が化した魚の肉を食べ、飢えを免れたということであろう。この奇妙な話はその奇妙な文體と相俟って、それが日本で勝手に作られたものであるという印象をあたえようが、實はそうではない。次に引く干寶『搜神記』^②卷十九の記事は、右と同じ話である。

孔子厄於陳、絃歌於館中。夜有一人、長九尺餘、著皂衣高冠、大吒、聲動左右。子貢進問、「何人耶。」便提子貢而挾之。子路引出、與戰於庭。有頃、未勝。孔子察之、見其甲車閒時時開如掌。孔子曰、「何不探其甲車、引而奮登。」子路引之、沒手仆於地、乃是大鯉魚也、長九尺餘。孔子曰、「此物也、何爲來哉。吾聞物老則群精依之、因衰而至。此其來也、豈以吾遇厄絕糧、從者病乎。夫六畜之物、及龜蛇魚鱉草木之屬、久者神皆憑依、能爲妖怪、故謂之五酉。五酉者、五行

之方、皆有其物。酉者老也、物老則爲怪、殺之則已、夫何患焉。或者天之未喪斯文、以是繫予之命乎。不然何爲至于斯也。」絃歌不輟。子路烹之、其味滋、病者興。明日遂行。

孔子陳に厄し、館中に絃歌す。夜一人あり、長九尺餘り、皂衣高冠を著し、大いに吒り、聲は左右を動かす。子貢進みて問う、「何人なるや」と。すなわち子貢を提げてこれを挾む。子路引き出で、ともに庭に戦う。頃あるも未だ勝たず。孔子これを察し、その甲車の間時々聞くこと掌の如きを見る。孔子曰く、「何ぞその甲車を探り、引きて奮登せざるや」と。子路これを引けば、手を没して地に仆る。すなわち大鯉魚なり。長さ九尺餘り。孔子曰く、「此の物や、何すれぞ來たるや。吾聞くに物老いれば則ち群精これに依るは、衰うに因りて至るなりと。此れその來るや、豈に吾れ厄に遇い糧を絶ち、從者病むを以てなるか。それ六畜の物及び龜蛇魚鱉草木の屬、久しき者は神みな憑依し、よく妖怪となる、故にこれを五酉と謂う。五酉なる者は五行の方、皆その物あり。酉は老なり。物老ゆれば則ち怪となる。これを殺せば則ち已む、それ何ぞこれを患わん。或いは天の未だ斯文を喪さず、これを以て予の命を繋ぐか。然らざれば何すれぞ斯に至るや」と。絃歌して輟まず。子路これを烹る。その味滋し、病者興く。明日遂に行く。

『搜神記』のこの記述は、『淡海記』に比べてより整理され、かつ詳細ではあるが、話の内容は兩者基本的に同じである。この荒唐無稽な話は『論語』が述べる陳蔡の厄に際し、なぜ孔子と弟子は飢死にせずすんだのかという疑問に對する説明になっており、所謂志怪小説なるものの起源の一つが、『論語』等の儒教經典の解釋にあったことを知りうる點で興味深い。もしこの話が『搜神記』に採録されていなかったなら、『淡海記』の記述内容が元來中國のものであるかどうかは、おそらく大いに疑問視されたであらう。そして兩者比較してみるならば、『淡海記』が『搜神記』もしくはさらにそれを溯る中國のなんらかの原資料を、日本でリライトしたものであることは明らかである。このことは一般に當時の日本人撰述の

佛教文獻に見える奇異な内容の記述が、決して日本で作られたものではなく、原據は中國にあったことを物語っているよう。『淨名玄論略述』の場合も事情はおそらく同じであって、なんらかの中國文獻をリライトしたか、あるいは中國での傳聞を記述したものと考えるのが妥當である。ただし中國ではその原資料がすでに亡佚したか、あるいはそもそも單なる口頭の風聞にとどまり記録されなかったのであろう。

なお先の引用の後半についてに記した『論語』子罕篇に對する鄭玄の注は、實は何晏の『論語集解』に包咸の注として引くものと同文である。ただ『論語集解』では弟子の名を顔剋とするのを『中論疏記』の方は剋頤に作るが、これは『中論疏記』の書寫段階あるいは翻印の際の誤記であろう。周知の如く、『論語』の鄭玄注は早くに散佚し、現在では敦煌で發見された數種の寫本及びトルファン出土の有名な卜天壽抄『論語』などによって部分的に知りうるのみである。そしてそれら出土發見寫本の鄭玄注は、『論語集解』では往々にして孔安國あるいは包咸の注と重なることが指摘されており、唐代すでにこの三者の注が混淆していたことが分るのである。^④とすれば、『中論疏記』の鄭玄注をあなたがち誤りとは決められないのであって、むしろこの一條を包咸ではなく鄭玄の注とする中國の文獻を反映している可能性は高いであろう。『論語』鄭玄注輯本にはむろんこの條は採られていないが、少なくとも佚文に準ずるものと見て差支いない。このこともこれらの資料が中國の文獻をかなり忠實に踏まえていることの一つの傍證たりうるであろう。

六 『淨名玄論略述』所引の『傳』と智藏

以上、『淨名玄論略述』所引の『傳』に見える北周及び陳滅亡の傳説とそれに附隨する陳後主とその子の詩が日本で作られたものではなく、その原據が中國にあったとする筆者の考えのあらましを述べた。もしこの考えが正しいとするならば、

ではそれはどのようにして日本にもたらされたのであろうか。そこで注目されるのは『浄名玄論略述』の撰者、智光の師である智藏である。智藏は入唐僧であった。その傳は『懷風藻』に見える。

智藏師者、俗姓禾田氏。淡海帝世遺學唐國、時吳越之間有高學尼、法師就尼受業。六七年中、學業穎秀。同伴僧等頗有忌害之心。法師察之、計全軀之方、遂被髮陽狂。奔蕩道路。密寫三藏要義、盛以木筒、著漆密封、負擔遊行。同伴輕蔑、以爲鬼狂、遂不爲害。太后天皇世、師向本朝。同伴登陸、曝涼經書、法師開襟對風曰、我亦曝涼經典之奧義、衆皆嗤笑、以爲妖言。臨於試業、昇座敷演。辭義峻遠、音詞雅麗。論雖蜂起、應對如流。皆屈服莫不驚駭。帝嘉之、拜僧正。時年七十三。

智藏師は俗姓禾田氏^{あわた}。淡海帝の世に唐國に遺學さる。時に吳越の間に高學の尼あり、法師尼に就きて業を受く。六七年の中に學業穎秀たり。同伴の僧等、頗る忌害の心あり。法師察して軀を全くせん方を計り、遂に被髮陽狂し、道路に奔蕩す。密かに三藏の要義を寫し、盛るに木筒を以てし、漆を著けて密封し、負擔遊行す。同伴輕蔑し、以て鬼狂となし、遂に害をなさず。太后天皇の世に、師本朝に向う。同伴陸に登り、經書を曝涼す。法師襟を開き風に對して曰く、「我もまた經典の奧義を曝涼す」と。衆みな嗤笑し、以て妖言となす。試業に臨み座に昇りて敷演するに、辭義峻遠にして音詞雅麗、論は蜂起するといえども、應對流るるが如し。みな屈服し驚駭せざるなし。帝これを嘉とし僧正に拜す。時に歲七十三。

智藏がいつ入唐したのかは明らかでないが、淡海帝すなわち天智天皇の時と言えば、天智四年（六六五）の第五回あるいは天智八年（六六九）の第七回の遣唐使に隨伴してであつたらう。第六回の遣唐使は唐に至っていない²⁰。この頃、唐は高宗

の世、陳朝滅亡にまつわる傳説はいまだ語られていたであろうし、裴矩の『開業平陳記』もすでに流布していたはずである。しかも智藏は、吳越の地の高學の尼について六七年も勉強したというのである。吳越の地は言うまでもなく陳の故地である。後主に關する傳説が他の地よりも熱心に語られていたに相違ない。そして尼という身分は、そのような世間の風聞、傳説を語り傳えるにはきわめてふさわしいものであろう。

さらに智藏は一般の僧とはよほど性行の異なる人物であった。髪をのばし狂人をよそおって各地を遊行したとすれば、ふつうの學僧では知りえない唐社會のさまざまな世俗的側面に觸れる機會も多かったであろう。しかも彼は聰明で記憶力に秀でていたらしい。

『懷風藻』の語る智藏の人物像から考えると、彼が吳越の地において、あるいは尼を通じてあるいは遊行の道中で、陳後主などに關する當時の傳説及び詩を聞くか、それについての文獻を入手し、日本にもたらした可能性は、むろん想像の域を出ないが、大いにありそうなことと思えるのである。『淨名玄論略述』に引かれた『傳』は、智藏が唐土での傳聞を自ら記錄したか、もしくは唐からもちかえた文獻をリライトして、弟子の智光に傳えたものではないだろうか。

七 陳後主「臨行詩」と大津皇子「臨終一絶」

さて『淨名玄論略述』の傳説と詩が中國で出來、日本にもたらされたものとすると、次はいよいよ最後に陳後主の詩と大津皇子の詩との關係が問題となる。すでに述べた如く、兩者はほぼ同時期に并存していたのであり、時間的前後關係を外的條件によって明らかにすることはできない。したがって殘された方法としては、兩者の表現の相違を比較検討する以外にはないであろう。そこで兩詩を次にもう一度示すことにする。

陳後主詩

鼓聲推(推)命役(短?)、日光向西斜。黃泉無客主、今夜向誰家。

大津皇子詩

金烏臨西舍、鼓聲催短命。泉路無賓主、此夕誰家向。

大津皇子詩の末句の「誰」は一に「離」に作るが、前稿で述べた如く、これが字形の類似によって日本語的な語順を改めようとした結果であることは、一連の臨刑詩を見れば明らかであり、原作は「誰」であつたに相違ない。

まず兩者で異なっているのは叙述の順序であり、これについては陳後主詩は他の臨刑詩と共通しており、大津皇子詩は孤立している。またこれに關連して、大津皇子詩の末句は中國語としては不自然な語順になっており、それはまた押韻字の相違にも影響している。大津皇子詩の「命」「向」の二字が、少なくとも作者の意識においては韻を踏むと考えられていたであろうことは、やはり前稿で述べた。ただこのような中古音の曾梗攝(-ing)と江宕攝(-ang)が押韻する例が、『懷風藻』には他にもある事實をここで補っておきたい。それはほかならぬ智藏の「秋日言志」詩における「情・聲・驚」と「芳」の押韻、および智藏のすぐ後に作品が配列される葛野王の「春日翫鶯梅」詩での「聲・情」と「陽・觴」の押韻である。²⁾大津皇子の詩は實は智藏のすぐ前に置かれていたのであり、この三人の詩に同じような押韻現象が見えることは、『懷風藻』初期の詩人たちがこのようなやや古めかしい語音體系を共有していたことを物語るであろう。しかしそれにしても大津皇子詩の「命」と「向」は他の二例とちがって仄聲であり、これが破格の押韻であることに變りはない。

兩詩を比較して次に氣がつく點は、語彙の相違であろう。兩詩の間では、「日光—金烏」「黃泉—泉路」「客主—賓主」「今

夜―此夕」の如く、同じ事がらを意味する別の語彙が用いられているのである。そして陳後主詩の語彙がどれも平易な日常語であるのに對して、大津皇子詩が用いたのはややひねった詩的な言語であると言ってよいであろう。その中でも「客主」と「賓主」は、前稿でも觸れたが、本稿の問題を考える上で重要な意味をもっている。

「客主」と「賓主」はともに「賓客と主人」を第一義的に意味しよう。しかしこの場合、この第一義的な意味は明らかに相應しくない。なぜならもし黄泉への道に、主人はともかく客すなわち死者がいらないのならば、「今夜(此夕)誰が家に向わん」という本句は主語を失い、この詩全體がナンセンスにおち入ってしまうからである。したがって「客主」にしろ「賓主」にしろ、ここでは賓客をもてなす主人という意味でなければならぬ。

ところで客主には、『三國志・魏志』卷七「呂布傳」の許汜のせりふに、「昔亂に遭い下邳を過り元龍を見るに、元龍は客主の意なく、久しく相ともに語らず」とあるように、「客主」と言いながらどちらかと言えば「主」に重きを置いた用法がある。右の「客主の意」とはまさに「客をもてなす主人の氣もち」を意味しよう。しかるに「賓主」の方には、そのような意味を期待することが困難である。

そもそも「異同」「是非」のように對立する二語の組合せがどちらか一方のみを意味する偏指的用法は口語にこそ生まれやすいであろう。「客主」はふつうの日常語であるが、賓主は『禮記』などの經書に典據をもつ古典語であり詩語であった。現に索引類やコンピューターによる検索を試みると、六朝隋唐の詩に「賓主」は頻出するが、「客主」は一例も見出すことができないのである。「客主」は明らかに詩語ではない。また、「客」には旅人の意味があるが、「賓」にはなく、その點でも「賓主」はこの詩に相應しくない。

以上の考察によってほぼ明らかとなったことは、だれかが陳後主詩の語彙をより詩語として相應しい同義語に入れ替え、かつ叙述の順序や語順を組み替えたという事實であろう。その結果できあがった大津皇子詩は、やや無理のある韻を

踏むことになり、さらに「客主」と「賓主」の意味の相違に気づかなかった改作者の不注意によって、いわば馬脚を露すことにもなった。泉路に賓も主もないのであれば、この詩は成り立たない。

すなわち厳密に言えば、大津皇子「臨終一絶」詩は通じない詩なのである。²⁵よしや『懷風藻』が何らかのルートによって中國に渡り、中國の文人の目にとまったとしても、この通じないしかも奇妙な押韻の詩の影響のもとに、五代の江爲以下の歴代の臨刑詩が生じたとは到底考えられない。「臨終一絶」はやはり中國の詩をもとに改作されたものであろう。

ではだれが何の目的でこのような改作を行ったのであろうか。だれがについては、これまでの記述から智藏あるいは淡江三船などを想定できるかも知れないが、もとより推測の域を出ない。ましてその目的に至っては、推測をも越える問題である。

注

- (1) 小島憲之『萬葉以前——上代人の表現』(岩波書店 一九八六) 第三章。濱政博司『日中朝の比較文學研究』(和泉書院 一九八九) 第二部「大津皇子臨終詩と金聖嘆・成三問——日中朝の臨刑詩の系譜」、同「大津皇子臨終詩群の解釋」(『和漢比較文學叢書』第九卷、『萬葉集と漢文學』汲古書院 一九九三)。
- (2) 金文京「黄泉の宿——臨刑詩の系譜とその背景」(『興膳教授退官記念中國文學論集』汲古書院 二〇〇〇)。
- (3) 『日本大藏經』方等部章疏五收。
- (4) 清・宋澤元輯『懺花齋叢書』(光緒十三年刊) 收。
- (5) 『古本戲曲叢刊』第四集收。
- (6) 『景印文淵閣四庫全書』(臺灣商務印書館) 第二二三冊。
- (7) 錢南揚校注『永樂大典戲文三種校注』(中華書局 一九七九) 收。
- (8) 『韓國歷代文集叢書』44 (景仁文化社 ソウル 一九九三)。
- (9) 周作人『苦竹雜記』(上海良友圖書 一九三六) 收。
- (10) 劉百閔等著『中日文化論集』(中華大典編印會 臺北 一九五五)。
- (11) 何冠彪『戴名世臨刑詩辨偽』(『中華文史論叢』一九八三—三 中華書局) に引用。
- (12) 注(1) 前掲論文。
- (13) 『日本大藏經』第十般若部章疏・『大日本佛教全書』第六。
- (14) 『日本古典文學大系』三『萬葉集』一(岩波書店 一九五五) の注参照。
- (15) 興膳宏・川合康三著『隋書經籍志詳考』(汲古書院 一九九五) 參照。
- (16) 「留水」は「流水」すなわち「流水帳」(帳簿) にかけた洒落。王禿才は帳簿つけが仕事であった。
- (17) 『大正大藏經』No. 235。
- (18) 注(1) 前掲書。

- (19) 伊藤隆壽「安澄の引用せる諸注釋書の研究」(『駒澤大學佛教學部論集』第八號 一九七七)、松本信道「安澄『中論疏記』所引『淡海記』逸文(覺書)」(『國書逸文研究』第十六號 一九八五) 參照。
- (20) 汪紹楹校注『搜神記』(中華書局 一九七九)。
- (21) 「唐景龍四年寫本論語鄭氏注殘卷說明」(『考古』一九七二)、金谷治編『唐抄本鄭氏注論語集成』(平凡社 一九七八)の「鄭玄と『論語』三」「鄭玄注論語」に關する問題」參照。
- (22) 木宮泰彦『日華文化交流史』(富山房 一九五五)第二章「遣唐使」參照。
- (23) 諸本のうち「誰」に作るのは、群書類從本と林家本である。群書類從本と他本との關係については、山岸德平「懷風藻概論」(『上代日本文學講座』第四卷 春陽堂 一九三三)、足立尚計「懷風藻の諸本」(『皇學館史學』創刊號 昭和六十一年)、沖光正「懷風藻の諸寫本」(辰巳正明編『懷風藻—漢字文化圈の中の日本古代漢詩』笠間書院 平成一

- (24) 二年)など參照。但し諸家の見解は必ずしも一致しない。後考を俟つ。この他、中臣大島「詠狐松」は「明・天・榮・輕」と押韻しており、「天」は全くの破格となる。問題の第四句は、「貞質指高天」であるが、「高天」はあるいは「高冥」の誤りであろう。『後漢書』蔡邕傳に、「抗志高冥」とあり、「高天」と同義、かつ下半部の字形が似る。『懷風藻』の押韻については、吉田幸一「懷風藻の押韻について」(『國學院雜誌』第四三卷一二號・同第四四卷一號 昭和二二・十三年)、月野文子「懷風藻の押韻—韻の偏りの意味するもの」(『和漢比較文學叢書』第二卷 汲古書院 昭和六一年)、黃少光「懷風藻と中國の詩律學」(注23前掲辰巳正明編書)など參照。
- (25) ただし唐・丘爲の「尋西山隱者不遇」詩に「雖無實主意、頗得清淨理」とあり、「實主」を主人の意に用いた例が、全くないわけではない。

本研究は、共同研究「文獻と情報」(班長 勝村哲也)の報告である。